

# 漁 況 海 況 予 報 事 業 \*

阪本俊雄・竹内淳一・武田保幸・樫山晃晴  
渡辺勇二郎・調査船「わかやま」浜口英雄他六名

## 目 的

本県沿岸および同沖合の海況と本県沿岸の漁業の漁況をモニタリングして、海況と漁況に関する調査研究を行う。同時にこれらの情報を漁業関係者に報告して漁業経営の合理化に資する。

## 方 法

平成2年度漁況海況予報事業実施方針（水産庁）による。

## 結 果

和歌山県漁海況情報（第71～第82報，毎月）ならびに沖合黒潮調査速報（1990. No.4～11、1991. No.1～3）にすべて速報した。特徴的な海況と漁況の概要は以下のとおりである。

### 1 海況

1989年11～12月に熊野灘に形成された冷水塊は1月後半には遠州灘沖合にも拡大して勢力を保っていたが、徐々に規模は縮小して11月以降は黒潮流型はC型となった。そして冷水塊は東偏してこれを迂回する黒潮は伊豆列島線の東側を北上した。

このような冷水塊の消長に連動して潮岬沖合の黒潮は4月前半の70湊から徐々に接岸して8月後半には30湊、10月後半には20湊となった。後半1991年3月までは20～40湊の間で小刻みな変動をして、平均は25湊であった（表1）。

沿岸流況は、黒潮が遠州灘沖合で石廊崎を向けて北上していた7月頃までは、熊野灘においては上り潮（南西流）が卓越した。紀伊水道沖合では芸東系暖水の波及が冬期から頻繁に発達し、沖合漁場にこれは影響したが沿岸域までの波及とはならなかった。そしてこの芸東系沖合暖水のパターンは黒潮が潮岬20湊接岸のときまで続き、以後紀州暖水のパターンがみられる様になった。しかしこれは前述のように黒潮が20～40湊の間で小刻みな変動をしていたためにまだ安定したものではなく、上り潮、下り潮と変化が激しかった。

漁場水温は1990年冬期は、記録的な暖冬多雨と黒潮の潮岬50湊以遠への離岸による中層顕著湧昇冷水の沖合化で温暖化し、3～6月も沿岸にはこの冷水は係らなかった。しかし黒潮が30～40湊になった7、8、9月には沿岸漁場に係り、100～150m層は低温激化した。この傾向は'91年の冬期まで続いた。

紀伊水道フロントの形成は、'90年の冬春期は黒潮離岸と暖冬で小さかったが、'91年は先鋭なものとなった。また夏期は暖冬に続く高温で経過して、黒潮の強流域が沖合化して潮の流れが弱まった紀南沖合域では6、7月には1～2℃の水温変動を伴う小さな潮目（潮影）が広範囲にわたってみられた。

※漁海況予報事業費による。「平成2年度漁況海況予報事業結果報告書」として既報。

## 2 漁況

内海マダイ '90年の加太漁獲量は79tと最近年ではまずまずとなった。黒潮の離接岸変動と関係があって、離岸期間であった前半の増加は顕著であったが、後半は接岸で伸び止る。

加太その他の漁況 マダコは今夏は播磨灘で好漁で秋以降加太でも増加しだす。秋以降、ハマチ、サゴシ好調。

サワラ 紀伊水道上りサワラは、顕著なメイストームと黒潮接岸などによる暖水貫入はなく漁期は4月下旬より5月中旬までと長かった。しかし低調な漁況で大獲れはなかった。水道南部も例年になく漁期は長引き5月上旬までみられた。秋のサゴシの出荷は上記加太では多かったが水道では多くなかった。越冬期御坊のサワラは、'87年以降の漁況不振は大きく、これは漁場形成上からは'88年度の黒潮異常接岸等の影響が大きかったが、最近の漁獲傾向からみてこれは播磨灘における異常漁獲増と符節していて、水道への南下資源の減少を来たしていることが指摘できる。

タチウオ 水道内水温は6月までは18℃以下で不漁で経過したが7月頃から18℃以上の適温となる。'88年9月～'89年8月までの黒潮異常接岸によって、'89年には中タチウオの来遊とその産卵に由来する資源により'90年7月～9月の夏期漁は上記の適水温となると共に大タチウオの漁獲水準高くなる。これは'76年の春仔資源の再生産が黒潮離岸によって断たれた'77年以降最も高い水準で、最近のたびたびの黒潮接岸は以前の春仔群資源の復活の兆しを思わせるものがあったが'76年以前の400～1,200kg（大タチ、隻/日）にはまだ及ばない。この夏漁の好調は10月も持続した。なお近年本種曳縄漁は沿岸漁場に重要な位置を占めるようになって来ている。

シラス 本年の漁況は黒潮離岸で水道内はいずれも'87年の離岸年と同規模の大幅な減少を来たした。ことに内海部ほど春漁へのこの影響は大きかった。しかし水道外域では芸東系暖水で前年並となった。5月中旬にマイワシからカタクチとウルメに交代。内海発生カタクチ夏仔は7月に好調であったが、これは約1ヶ年しか持続せず8月以降切れる。3月に入ってイカナゴ好調。

内海マサバ・マアジ マサバは5月下旬に来遊、100尾/日・隻。黒潮接岸の'89年発生マサバの水準は最近年では高いとみられた。マルアジは芸東系暖水発達の影響で例年と異なり6月上旬に内海に入り込んだ模様で漁の好転は8、9月。冬期は黒潮接岸により紀伊水道前線の外側にマサバ釣漁場が形成される。'89年には活況、'90年は低調、本'91年は黒潮接岸の1月後半から合ノ瀬で活況。

外海アジ・サバ・イワシ類 '88年秋～'89年9月の黒潮接岸が作用して内海域で発育したと考えられる体長27～30cmの当才マサバが'89年8月～10月に大量に加入した。これはその後生長加入しながら本'90年には周年を通して2そうまき網の漁獲対象となり、本年は好漁年となった。しかし黒潮離岸の'90年は当才群加入がほとんどみられない状態である。なお11月以降は中層顕著湧昇による低温化で漁不振。

マアジの2そうまき網漁獲対象群は1～3才魚で主に2才魚である。'88年内海発育の水道外域への移出滞留群が芸東系沖合暖水の影響で春期（4月）の大量漁獲となって現れた。

マルアジはマサバ、マアジとは反対に黒潮離岸低温年に資源は増加するが、これの漁獲対象群も1～3才魚で主に2才魚である。'90年の漁獲は主に'88年夏季の黒潮が接岸に転じたときの沿岸域低温化（76報、図2）が作用して増加した資源であって、5～6月に一時15℃以下に低温化したときに5月一ヶ月内の漁獲としては過去最高の約1,000tと多獲された。水道フロント消滅過程にある北上期の典型的な前線漁場。以上のように1、2年前の海況条件が良かったためにタチウオ、マサバ、マアジ、マルアジと、いずれの資源もその豊度は本年は高かったとみられる。しかしその一方、1そうまき網では黒潮離岸により沿岸域における漁場の形成はなく、いずれの魚種も大不漁と

なった。

棒受網ウルメ 黒潮離岸から接岸期に当たり、串本では10月にかけて漁は尻上がりに上昇。'86年の好漁とはいかなかったが潮ゆるくしてまずまずの好漁。南部は6～8月の前半が良く、これもまずまずの漁。

サンマ 勝浦サンマは来遊遅れ11月25日初漁、2月上旬に終漁。黒潮流路C型の不漁年。

スルメイカ 主漁期の夏場は黒潮接岸で中層顕著湧昇が陸棚にかからず不漁した。しかし8月以降すさみ沖では折々これが形成されて漁の好転したときもあった。ところが紀伊水道側ではこれが形成されず田辺の当該従事船の減少は顕著であった。

カツオ 黒潮離岸により5月下旬にようやく19～21℃の適温水帯が沿岸域に形成された。しかし漁期既に遅く、3～5月のカツオ漁期漁獲量は最近年でももっとも低いものとなった。魚体43cm(1.4kg)の小小主体。その後6月一杯21℃以下の適水温が持続したので異例の終漁期の長引きをみせたが、漁獲は春期に比べて夏漁は僅少。7月にもなお若干漁有り。8月には黒潮若干離岸年にみられる魚体約30cmの新子カツオの来遊があって、9月に入ってこれに下りカツオ(2、3kg)が混じる。黒潮の離岸から接岸傾向に当りこれは11月まで続く。またこの接岸傾向により正月明けの1月からも曳縄漁によるカツオがぼちぼちみられた。

トンボ 黒潮接岸といっても本格的な強い接岸ではなく、'86年のようにはいかなかったがある程度の漁はみられた。'90年は黒潮離岸で全く漁はなかった。

ハマチ・メジロ ハマチは内海域では多かった模様であるが外海域ではそのようなことはなかった。メジロ(4kg物)は紀南域へは12月下旬になって本格的来遊。昨年は中旬からであったので、本年の漁獲は漁期が短い分だけ減って昨年の約半分に留まった。

ブリ 宇久井には2月下旬の冬期気圧配置と熊野灘沖合からの暖水波及、太地には3月下旬の暖水波及でそれぞれまとまった入網があったが、1～3月で合計2,000本余と不漁年であった。

その他 '89年の昨秋から'90年冬期の黒潮離岸蛇行期に好漁であったトラフグは今秋は極めて低い水準で経過した。黒潮が漁況を端的に左右する魚種の一つといえる。

### 3 沖合・沿岸・浅海定線調査報告、海況・漁況情報の発行

#### 1) 沖合・沿岸・浅海定線調査報告

主な配布先 水産庁、水産研究所(南西、中央他)、都道府県水産試験場、気象庁、漁業情報サービスセンター、水路部

発行部数 沖合定線報告 45部

沿岸・浅海定線報告 55部

南西海区水産研究所外海調査研究部に所定の海洋観測入力様式「POD」にてデータを入力したフロッピーディスクで報告した。

#### 2) 海況・漁況情報の発行

a) 海況速報 漁業情報サービスセンターからファックス受信した海況速報はすべて、県下関係漁協に直ちにファックス送信。

b) 人工衛星利用沿岸海況図 サービスセンターから受信後、利用価値のあるものは県下関係漁協にファックス送信。

c) 南西東海海域海況速報 上記a), b)と同じくファックス送信。

d) 南西東海海域沿岸漁況情報 適宜業種別広域漁況を関係漁協にファックス送信(2～7月)

e) 沖合黒潮調査速報 「わかやま」による本県沖合の黒潮とその内側域の漁場海況調査結果

速報で関係漁協、関係機関にファックス送信。延12回。

f) 和歌山県漁海況情報（第71報～第82報） 和歌山県沿岸沖合を中心とする1ヶ月の海況と漁況及び資源の解説。

発行回数 月1回、1990年4月～1991年3月

主な配布先 水産庁、水産研究所（南西・中央）、都道府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者。

発行部数 200部

g) その他 毎週1回海況、漁況の新聞広報（週間南紀ウィークリー、紀伊民報等）。

定地水温は毎日、気象協会を通じて広報（和歌山放送）。

表1 潮岬沖合と紀伊水道（合ノ瀬）沖合の黒潮中心部位置（正南距離，湊）

月	1990.4	5	6	7	8	9	10	11	12	1991.1	2	3	
潮 岬	前半	70*	50*	50*	45*	40*	30*	40*	40	25*	25*	20*	20*
	後半	40	55	65	50	30	30*	20	35*	20	20	20	30
合ノ瀬	60	60	70	70	50	—	55	55	50	40	45	—	

\* 印は水路部海洋速報による